

優秀賞

## Change it! For the future.

小林聖心女子学院中学校 2年 平野 恵理佳

「しえんをありがとうございます。うれしいです。お米がいただけたのでお肉が買えます。」便箋にクレヨンで描いたチューリップの絵が添えられていた。これは、無料でお弁当や食材を届ける子ども食堂に、小さな子供が書いた手紙だ。豊かな日本でも、貧困に苦しむ子供達がいる。コロナ禍で生活が苦しくなり、学校に行けず、公園の水を飲み、一日一食の子供がいることをニュースで知った。

子供は貧困から抜け出す術がない。様々な境遇の中で生きる子供達と自分を重ね合わせた。私の中での「当たり前」は当たり前ではなかった。いったい私に何ができるだろう。

「お中元にいろいろいただいたから、近くのスーパーのフードドライブに持って行こうと思うの。一緒に行ってみる？」

「フードドライブ」を知るきっかけは母の一言だった。食支援が必要な方々に届ける為、家庭で使い切れない未使用食品を寄付する活動だ。同じ時期に学校で市への提言をまとめる学習があり、私は、SDGsの一環でもあるフードドライブの調査を始めた。市の政策室や社会福祉協議会、実施店舗にインタビューを行い、子ども食堂やひとり親世帯などが食支援を必要としている現実を知った。

やっと自分にできることを見つけ、昨夏からフードドライブの仕分け作業のボランティアを続けている。支援の中には、困っている子供

達に食べさせたいと、わざわざ購入して寄付してくださる方もいた。先月集まった食品の総重量は、約199kg。食品一つ一つに思いが込められ、善意が「命を繋ぐ」バトンになることを私はこの活動を通じて学んだ。

この夏、アメリカのボストンに住む高校生とフードドライブについて話す機会があった。海外の状況も知りたいという私の希望を父が知人に話し、オンライン交流を持ってくれた。知り合ったジェシーの地域では、フードドライブを学校や教会が主催しているそうだ。日常にボランティア活動が根付いていて凄と思った。調理した食事を食べてもらう「スープキッチン」という支援もあるという。話の中で、私は両国の違いに気づいた。食品事故が起きた場合のリスクだ。アメリカでは、故意過失のない限り、法律で保護されている。一方、日本では提供者を守る法律や条令が無く、参加をためらう団体があると聞いたことがある。もっともっと多くの方に、この活動を知っていただくことが私達の願いだ。今回、海を越えて、同じ志を持つ仲間に出会えたことが嬉しかった。来年の夏、私は海外のフードドライブも体験してみたいと思っている。

世界第三位の経済大国日本。我が国のフードロス、国連が途上国へ支援する年間量の1.4倍に当たる。しかし、7人に1人の子供が貧困という事実。私一人の力は小さいものかもしれない。でも、ボランティアを通して寄り添うことはできる。一人一人が意識を変え、努力した先には貧困のない明るい未来が待っているはずだ。私はそう信じている。